

教養科目と専門科目の プレゼンテーションにおける聞き手による評価要因の相違

矢野 香^{*1}

^{*1}長崎大学地域教育連携・支援センター

Differences on the Evaluation of Presentations among Listeners in the Liberal Arts and Major Subject Classes at the University

Kaori YANO^{*1}

^{*1}Center for Regional Educational Partnerships, Nagasaki University

Abstract

The aim of this study was to determine what affect the listeners' rating of oral presentations. The presentation theme was assumed to be one of the evaluation factors. A comparison was made between the presentation with the theme of 'self-introduction' in the liberal arts courses and that of 'academic research' in the engineering department. The listeners were asked to answer who was the best presenter and choose the reasons from the factors predetermined in a questionnaire. The result revealed that, in the presentation of 'self-introduction', Language, Facial Expression, Materials were found to be the evaluating factors. On the other hand, the participants who listened to academic presentations valued highly of Language, Body Language, and Eye Contact. The difference suggests that training which focus on different rating aspects should lead to better scores for oral presentations.

Key Words : Communication skill training, Presentation skill training

1. はじめに

プレゼンテーション力の育成は教育現場にとって大きなテーマの1つである。プレゼンテーション力は自分の考えを表現する力であり、表現力は2008年以降告示された現行の小学校¹⁾、中学校²⁾、高等学校³⁾の学習指導要領の中で「生きる力」の一つとして重視されている項目でもある。大学教育においても、厚生労働省(2004)があげた企業が若者に求める「就職基礎能力」のなかにコミュニケーション力がかかげ⁴⁾、具体的な内容として「状況にあった訴求力のあるプレゼンができる」という自己表現力を設定している。

このような社会的要請のもと、プレゼンテーション力の育成方法が多く研究されている。牧野

(2003)は、高等教育におけるプレゼンテーションのために不可欠な視点を「目的」「聞き手」「内容」「情報」「構成」「流れ」「原稿消化」「時間配分」「音声効果」「視覚効果」の10項目のカテゴリーに整理し、これらを学習目標とし授業設計をおこなった。村上ら(2010)は、大学生が獲得すべきプレゼンテーション能力を11能力にまとめ、それらの能力を向上するために「制作」「内容チェック」「制作物の修正」「リハーサル」「演じ方の修正」「本番発表」「視聴評価」の7つの段階によるプレゼンテーション教育の枠組みを示した。塚本(2012)は、大学生の学業成績と就職が内定するまでの日数には相関がないものの、学生のプレゼンテーション能力と就職が内定するまでの日数に

は相関があることを指摘した上で、アイコンタクトと相づちの訓練法を開発し効果を得ている。これらの先行研究は、従来のプレゼンテーション力を育成する教育を見直すかたちで進められているが、そもそも「表現力・プレゼンテーション力がある」とは具体的にはどのような行動のことを指すのであろうか。明確な定義なしに、プレゼンテーション力を上げるための効果的な訓練法の開発は困難である。

プレゼンテーション場面において、聞き手が話し手の印象を評価する要因としては、日本語の場合、話す速度がゆっくりとしているうえに手のジェスチャーが加わると知的で自信があると評価されること（藤原, 1986）や、「わかりやすい説明」と評価される話し手の特徴は、擬態語を伴ったジェスチャーが多いこと（大神, 1999）、さらに、スピーチ・プレゼンテーション中に視線が適切でないことや表情が真顔なこと、そして口に手をあてるなど自己接触がみられると、聞き手からの印象を下げるのが指摘されている（Snyder, 2010）。

実際にプレゼンテーション力を育成する教育プログラムを開発するためには、プレゼンテーションに対する聞き手の評価要因を明確にし、その要因に基づいた訓練を実施することが望ましい。そこで本研究では、プレゼンテーションにおいて聞き手が話者に対して評価している要因を明らかにすることを目的とし調査をおこなった。さらに、実際の大学教育現場においては、教養教育におけるプレゼンテーションと、専門教育課程におけるプレゼンテーションでは違いがあることが予測されるため、教養科目と専門教育科目とでその差異を検討することとした。

2. 方法

2.1 実験参加者

教養科目のプレゼンテーション講義の受講学生のなかから本研究への参加を同意した大学生 30名（男性 13名・女性 17名：学年 1～2年）、工学部の専門科目であるプレゼンテーション講義の受講学生の中から本研究への参加を同意した大学生 68名（男性 66名・女性 2名：学年 1～2年）を実験参加者とした。参加者には実験の目的と内容を

説明し、参加するかどうかは成績評価に関係がないこと、なんら不利益を被ることなくいつでも実験を辞退できること、個人情報を守られることを口頭と書面で伝え同意書に署名を得た。なお、本研究については長崎大学倫理委員会の承認を得ている（承認番号 15062618）。

2.2 手続き

両群とも講義のなかで一人 3 分のプレゼンテーションを行い、その評価を学生同士でおこなった（教養科目：2015 年 6 月、専門科目：2014 年 12 月～2015 年 1 月）。プレゼンテーションテーマは、教養科目は「自己紹介」、工学部の専門科目は「私のお気に入り家電」とした。プレゼンテーションスキルに関しては、事前にとくに訓練はおこなわなかった。個人にたいするプレゼンテーションの評価は、「話の内容」「話の組み立て方」「言葉づかい」「ジェスチャー」「表情」「アイコンタクト」「声」「発表スライド」というバーバル・ノンバーバルの 8 項目のスキルについて、5 かなり上手い、4 やや上手い、3 普通、2 やや下手、1 かなり下手の 5 段階評価でたずねた（巻末資料参照）。グループ内で比較評価するために、学生を無作為に 6～8 人のグループにわけグループ内で一番上手だと思う学生と、その学生の印象の良かったスキルについてたずねた（巻末資料参照）。

3. 結果

プレゼンテーションの評価に最も影響を与える要因は、「話の内容」「話の組み立て方」「言葉づかい」「ジェスチャー」「表情」「アイコンタクト」「声」「発表スライド」のどの要素によるものかを検討するために、教養科目と専門科目別に重回帰分析をおこなった。結果を表 1～2 に示す。自己紹介では「言葉づかい」「表情」「発表スライド」に対する標準偏回帰係数が有意であった。工学部プレゼンでは「言葉づかい」「ジェスチャー」「アイコンタクト」に対する標準偏回帰係数が有意であった。

表1 教養科目における重回帰分析結果 (n=30)

教養「自己紹介」(増減法)			
変数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数
言葉づかい	6.0190	3.0685	0.1998 [†]
表情	5.2971	1.7885	0.3143 ^{**}
発表スライド	12.8329	2.2633	0.5977 ^{**}

†p<.10 **p<.01

表2 専門科目における重回帰分析結果 (n=68)

専門「お気に入り家電」(増減法)			
変数	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数
言葉づかい	5.6380	2.2585	0.2083 [*]
ジェスチャー	9.9826	3.0369	0.4297 ^{**}
アイコンタクト	7.6221	3.4644	0.2891 [*]

*p<.05 **p<.01

4. 考察

重回帰分析増減法の結果から、自己紹介では「言葉づかい」「表情」「発表スライド」に対する標準偏回帰係数が有意であったことから、「話の内容」「話の組み立て方」「ジェスチャー」「アイコンタクト」「声」は有意ではなかった。工学部プレゼンでは「言葉づかい」「ジェスチャー」「アイコンタクト」に対する標準偏回帰係数が有意であったことから、「話の内容」「話の組み立て方」「表情」「声」「発表スライド」は有意ではなかった。

教養科目における「自己紹介」プレゼンテーションと専門科目における「お気に入り家電」のプレゼンテーションともに、「言葉づかい」が有意、有意傾向であったことから、発表内容によらず「言葉づかい」がプレゼンテーションの評価に影響を与える要素であることがうかがえる。このことから、プレゼンテーション力の訓練においては、「言葉づかい」は必須項目といえる。

教養科目と専門科目のプレゼンテーションの差異を検討するにあたり、そもそもの違いを考えると、テーマに対するプレゼンターの理解度があげられる。「自己紹介」という一般的なテーマは、何を話すべきかが明確にならないままプレゼンテーションをおこなった学生が多く見受けられた。一方、「お気に入り家電」というテーマにおいては、工学部の専門知識を使いながらその家電の特徴や将来性を発表していた。これら科目によるテーマの違いは、プレゼンターのテーマにたいする理解

度の違いでもあるといえる。

そのうえであらためて結果をみると、専門科目においては、標準偏回帰係数がジェスチャー(0.4297)、アイコンタクト(0.2891)であることから、話者にとって話しの内容に対する理解度が十分であるプレゼンテーションでは、ジェスチャーの訓練、アイコンタクトの訓練を優先して行なうと聞き手からの評価があがることが考えられる。教養科目においては、標準偏回帰係数が発表スライド(0.5977)、表情(0.3143)であることから、話者にとって話しの内容に対する理解度が不十分であるプレゼンではまずスライドの形で話しのストーリー構成をさせる訓練、表情訓練を優先して行なうと聞き手からの評価があがることが考えられる。

本研究の結果から教養科目と専門科目におけるプレゼンテーションでは、発表の評価に影響を与える要素が違うことが示唆された。そのため、プレゼンテーションの訓練法開発においては、話す内容に対する話者の理解度によって訓練法を変えると効果があがることが考えられる。今後は、詳細な検証とともに、プレゼンテーション内容に対する理解度をあげるための方法の検証も必要である。

参考文献

- 1) 文部科学省. (2008). 小学校学習指導要領. 東京書籍株式会社. pp.1-143.
- 2) 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領. 東山書房. pp.1-147.
- 3) 文部科学省 (2009). 高等学校学習指導要領. 東山書房. pp.1-356.
- 4) 経済産業省. (2006). 社会人基礎力に関する研究会 中間とりまとめ
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/chukanhon.pdf> (2015.12.31.取得)
- 5) 藤原武弘 (1986). 態度変容と印象形成に及ぼすスピーチ速度とハンドジェスチャーの効果. *心理学研究*, 57, 200-206.
- 6) 牧野由香里. (2003). プレゼンテーションにおける自律的学習のための学習環境デザイン. *日本*

教育工学会論文誌, 27(3), 325-335.

- 7) 村上和繁・正木幸子・松永公廣 (2010). プレゼンテーション教育でのリフレクションの強化(1)プロトコルから見た気づきの差異. *教育システム情報学会研究報告*, 24(5), 82-87.
- 8) 大神優子 (1999). 「わかりやすい説明」の特徴—発話と身振りの分析から—. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 41, 395.
- 9) スナイダー美枝 (2010). 発表の身体動作について：非言語コミュニケーションとしてのスピーチ. *桜美林論考言語文化研究*, 27, 309-323.
- 10) 塚本真也 (2012). プレゼンテーション授業における徹底訓練法とその教育効果. *砥粒加工学会学術講演会講演論文集*, 393-398.

評価用紙

プレゼンター 1人目					
学生(履修)番号	氏名				
話の内容	5	4	3	2	1
話の組み立て方	5	4	3	2	1
言葉づかい	5	4	3	2	1
ジェスチャー	5	4	3	2	1
表情	5	4	3	2	1
アイコンタクト	5	4	3	2	1
声	5	4	3	2	1
発表スライド	5	4	3	2	1

1. かなり下手 2. やや下手 3. ふつう 4. やや上手 5. かなり上手

最終投票

私は__番目のプレゼンターが
一番上手だと思う。
一番上手だったプレゼンターの最も印象の良かった
スキルはどれですか？

話の内容 話の組み立て方
言葉づかい ジェスチャー アイコンタクト
表情 声 資料スライド